

# 「太平洋の交差点」の日本仏教

## ——グローバル化とローカル化の交錯——

守屋友江

### 1. はじめに

本稿は、仏教を中心にハワイ日本人移民の今日までの歩みを論じることとする。アジア系アメリカ研究や日本人移民研究では、宗教に関する研究はそれほど多くない<sup>1)</sup>。それにもかかわらず、日本人移民は各地に宗教施設をつくってきた。その齟齬には、研究者が移民を総体的にどうとらえるか、という方法論の問題が含まれている。言い換えれば、研究者の関心とは別に、移民の生活にとってそれだけ宗教的ニーズがあったということでもある。

そこで本稿ではまず、移民にとって、異文化の不慣れな地での精神的支えとしての役割を宗教——日本人移民の大多数にとっては仏教——が担ってきたという点を論じることとしたい。次に、アメリカに渡った日本仏教が日本でイメージされるような葬式仏教のように、死者儀礼に関わる場としてだけではなく、カルチャーセンター的な場であったということ、第三に、ハワイで文化変容していく過程と戦時下の仏教について論じ、最後に今日の多文化状況における「アメリカ仏教」について述べることとする。

なお本稿では、アメリカでつくられた現地寺院を日本のそれと区別するため、固有名詞を除いて「仏教会」と呼ぶこととする。また、ハワイやアメリカに派遣された僧侶はほぼ全ての教団で「開教使（師）」と呼ばれているので、「僧侶」と「開教使」を適宜用いることとする。

### 2. 移民がつくった仏教会

ハワイは北太平洋のほぼ中程に位置し、日本とアメリカのほぼ中間にある。飛行機による往復が普及する以前は、ハワイは太平洋を横断する航路の中継点として、燃料や食料、水などを補給するための重要拠点であった。文字通りの「太平洋の交差点」であり、ハワイは様々な人と文化とモノが流入し、融合する場でもあったといえる。

ホノルル市のパリ・ハイウェイ沿いにある浄土真宗本願寺派系の Honpa Hongwanji Mission of Hawaii（本派本願寺教団、以下本派本願寺）は、インド風の白い建物で知られる。1918年に完成したもので、同じように「〈インド趣味〉」の影響を受けた建築物として著名な東京の築地本願寺や神戸の「モダン寺」（本願寺神戸別院）よりも完成年が早い<sup>2)</sup>。100周年を迎えたこの建物をはじめ、ハワイの仏教会を網羅した研究によると、初期は既存の建物を改築した「プランテーション住居型」として始まり、移民の経済状況が良くなるにつれて建築費が出せるようになると「日本風意匠型」、「布哇折衷型」、そして写真1の本派本願寺や、ハワイ浄土宗別院、曹洞宗ハワイ別院に見られるような「インド風意匠型」が登場したという<sup>3)</sup>。



写真1 本派本願寺の外観（筆者撮影）。建物の前に広い駐車場がある。

写真2のように、この建物の外観と内部の欄間はインド風だが、説教壇や信徒席はキリスト教会式で、席の背もたれには礼拝用の英語経典や「讃仏歌」の冊子が置かれている。仏像が安置されている内陣の装飾（荘厳）は、京都にある仏具店から輸入している。このように、インド、アメリカ（西洋）、日本の文化が建築の形で融合していることがわかる。



写真2 本派本願寺の内装（筆者撮影）。

では、これらの仏教会は誰が建てたのか。これらは仏教徒の日本人移民の寄付によってつくられ、維持されてきたものであり、日本の本山や、ハワイの経済を支配する「ビッグ・ファイブ」と呼ばれるサトウキビ・プランテーション会社からの助成も一部あるが、基本的には日本人移民がつくった仏教会である<sup>4)</sup>。

「太平洋の交差点」の日本仏教（守屋）

宗派としては、表1のように、ほとんどの宗派がハワイに渡っている。日本仏教諸宗派のハワイ、アメリカ本土への海外布教の流れとしては、まずハワイで布教の拠点を築き、その後さらに、表2のように日本人移民の集住地域であるカリフォルニア州など本土の西海岸へ進出している。「太平洋の交差点」にあるハワイは、そういう意味では日本から最も近いアメリカということになる（なお真言宗は、ハワイに開教使が派遣されて正式に布教が始まる前から在家の人々による「大師講」が広く行われており、その点では非公式ながらカリフォルニアよりも早くから活動があった<sup>5)</sup>）。

表1 ハワイにおける日本仏教諸宗派

布教開始年	宗派
1889	浄土真宗本願寺派*
1894	浄土宗
1898	浄土真宗本願寺派
1899	日蓮宗、真宗大谷派
1903	曹洞宗
1914	真言宗

\* 教団の正式布教ではなく、同派の僧侶 曜日蒼龍が個人で渡航。

表2 カリフォルニアにおける日本仏教諸宗派

布教開始年	宗派
1899	浄土真宗本願寺派
1912	真言宗
1914	日蓮宗
1921	真宗大谷派
1922	曹洞宗
1928	浄土宗

移民の出身地との関係で考察すると、小川真和子が述べるように出身地は広島、沖縄、熊本、福岡、山口、和歌山のように西南日本に集中している<sup>6)</sup>。これらの地域は沖縄をのぞいて浄土真宗や浄土宗の教勢が強いが、それ以外の宗派との対応関係は、ほぼ表3の通りにまとめられる。

表3 出身地と宗派の対応

本派本願寺	在家、開教使ともに広島（安芸）、山口、福岡、熊本など西日本
浄土宗	在家、開教使ともに山口（とくに周防大島）
日蓮宗	在家は熊本（清正公信仰との関連）、開教使は奈良ほか
真宗大谷派	ほぼ本派本願寺と重なる
曹洞宗	在家、開教使ともに広島（備後）出身

ハワイにこれらの宗派の仏教会があるのは、その地域からの移民が多かったことと関連がある。この地域にある村から若者が移民に行き、そうして連鎖的な移住が始まる。教団の側からいえば、檀家が渡航するのであり、やがて僧侶の派遣要請が日本に届くようになる。自分の檀那寺、あるいは近隣出身の僧侶に、昔から慣れ親しんできた法話を話してもらったり、葬式や法要を行ってもらいたいという要請が出てきたからである。

ではなぜ、移民たちは宗教を求めたのか。これは、移民労働者が炎天下での長時間労働という厳しい条件で、人種差別を受けながら働いていたことと無関係ではない。過酷な状況のため死亡率が高かったが、死者を葬る際に、プランテーション会社は死者の宗教を問うことなくキリスト教式の葬儀を行った<sup>7)</sup>。人が亡くなるという重大な出来事に直面して、本人の宗旨と異なる宗教で儀式が行われていたため、死者に対する哀悼、供養のために自分たちの宗派の教団へ

僧侶の派遣を要請したのである<sup>8)</sup>。1885年から「官約移民」として、日本人移民が急増した後、こうした問題への対応として開教使がハワイに派遣されるようになった。こうして彼らはそれぞれ、自分たちの信仰にもとづく精神的な支えとなる場を、自前でつくったのである。一人では多額の寄付は出せなくとも、数セントずつの小さな寄付を集め、大工仕事のできる人が腕を振るい、文字通り自分たちの手で仏教会を築いていった<sup>9)</sup>。

日本人移民がハワイの仏教会に求めたのは、葬式や法要などの死者儀礼のほか、自分たちの生活に関わる、いわば生きるための仏教であった。それは例えば、阿弥陀仏（浄土系の場合は釈迦仏ではなく阿弥陀仏を本尊とする）はハワイのプランテーション労働者を見捨てることがないとする内容の法話などからも、仏教が彼らの精神的な支えとなっていたことがうかがえる<sup>10)</sup>。

### 3. ハワイにおける文化変容と戦争の打撃

本派本願寺は仏教青年会の活発な活動で知られるが、それは日本の瀬戸内海地域の真宗地帯で広く行われていた、「小寄講」という伝統的な互助組織が基礎にあったといえるだろう。その関連についてはすでに論じたのでそれに譲るが<sup>11)</sup>、仏教青年会では月刊誌『同胞』を刊行しており、そこには仏教関連の論説や行事の案内のほか、就職斡旋や英語学校なども行っていたことが記されている<sup>12)</sup>。アメリカ本土でも同様に、現地仏教会が発行していた雑誌には、地元の日本人移民が経営する商店が広告を出しており、そうした「日系コミュニティのタウン誌」としての役割もあったといえる<sup>13)</sup>。

ハワイの日系仏教の歴史を追ったドキュメンタリー *Aloha Buddha* (アロハ・ブッダ) (Radiant Features, 2011年) で紹介されたように、仏教会は様々なイベントで日系コミュニティが集まる場であった。自分たちの地元の方言で語り合い、「婦人会」メンバーが参加者のために御齋などの食事を用意して、故郷を思い出しながら食事を共にする<sup>14)</sup>。ほかの日本人移民とのつながりを持てる場として、仏教会はコミュニティの結節点としての位置を占めていた。婦人会の役割は、従来の研究が男性中心に論じられてきたことと、文献史料があまりないために注目されてこなかったが、決して小さくはない。「写真花嫁」として渡航した女性たちは、婦人会のメンバーとして仏教会の様々な行事の実質的な運営を担い、また仏教会内外の諸団体と連携して積極的に活動してきた<sup>15)</sup>。

1910年代になると、日本人移民の中に定住をする者が増え、彼らは家庭を持つようになる。ハワイというアメリカの領土で生まれた二世たちは、合衆国憲法修正14条によりアメリカの市民権が得られる。出生地主義により、親が日本人でもアメリカで出生した子どもはアメリカ人だからである。そのため、日本人の家庭でアメリカ人として育つ子どもは、親とは英語を交えた日本語で話すけれども、学校あるいは社会では英語で話し、アメリカ人として公教育を受けようになる<sup>16)</sup>。

そういうハワイの社会環境がある中で、仏教会はどう対応したのだろうか。必ずしも英語を話せない親と、英語を第一言語とする子どもの間にコミュニケーションがとれない問題が生じてくる。そこでキリスト教会でも同様に、カルチャーセンター的な役割に加えて、学校的な機

能が求められるようになる<sup>17)</sup>。本派本願寺では一世の大人向けに英語学校を開設する一方、子ども向けに日本語学校も経営するようになった<sup>18)</sup>。

しかし、これらの日本語学校がアメリカの領土で設立されることに対して、とくに移民排斥論者から反対の声があがった。アメリカの準州であるハワイだけでなく、日本人移民が集住する本土の西海岸にできた日本語学校をめぐる、外国語学校への取り締まりが強化されるようになる。日系コミュニティでは、子どもを日本語と英語の両方ができるバイリンガルに育てて、彼らが日米の「架け橋」になることを期待し、仏教徒も日本語学校の経営に力を入れたが、移民排斥論者は、二世児童に日本語を教えると、二重の忠誠を求めることになってアメリカ人として育つのを妨害し、非アメリカ的になってしまうと批判した。さらに、言語だけでなく、宗教的にも仏教は「異端」でありアメリカ文化にそぐわないという言説が新聞メディアや学校の教育現場に見られるようになり、民族的・宗教的マイノリティーである仏教徒の日系人たちは偏見や差別に晒されていった<sup>19)</sup>。

そういう中で、本派本願寺の開教監督だった今村恵猛（1867～1932）は、現地日本語新聞『布哇報知』の社長であった牧野金三郎（Fred Kinzaburo Makino, 1877～1953）とともに、仏教会付属の日本語学校存続のために、連邦最高裁まで裁判で争った。興味深いことに、同時期にネブラスカ州ではドイツ系移民のドイツ語学校が同様の裁判で勝利していた<sup>20)</sup>。連邦最高裁は、ハワイ準州による取締法が日本語学校で生徒が継承言語を学ぶ機会を損なうため違憲であると判決を下したが、この判決はアメリカ社会をとらえる上で重要な意味を持つ。というのも、人種差別と偏見に満ちたヘイトスピーチがある一方で、合衆国憲法に照らして、移民の子弟が自分のルーツである文化や言語を継承し学ぶ権利を認め、外国語学校取締法は憲法違反であると連邦最高裁が判断を下したからである<sup>21)</sup>。この点は、昨今の日本における朝鮮学校への無償化除外の問題と裁判所の判決とを比較すると、よりその意味が明らかになるといえるだろう。

また、日系仏教徒に向けられた人種差別と宗教差別は、今日的な問題でもある。例えば、スペイン語を話すヒスパニック系アメリカ人に対して、スペイン語ではなく英語を使えと嘲笑する人が多くなりつつあるが、とりわけ2016年の大統領選挙のころからヒスパニック系住民やムスリムへの差別を煽ったドナルド・トランプが大統領に就任した事を受けて、アラブ系やムスリム、ムスリムに間違われたシク教徒（シク教徒）などへのヘイトクライムが増えている<sup>22)</sup>。トランプ政権下での「ムスリム禁止令」やヒスパニック系住民の家族を分断する強制送還の問題に対して、本派本願寺教団では日系アメリカ人がかつて人種差別と宗教差別による人権侵害を受けた経験から、これを二度と繰り返してはならないとする抗議声明を出している<sup>23)</sup>。

さて、親日的であるから非アメリカ的・反米的な宗教、とみなされたハワイの仏教教団では、実は戦前から英語布教が始まっていた。英語布教はアメリカ人——第一には日系二世向けであり、またヨーロッパ系アメリカ人の改宗者——向けである<sup>24)</sup>。日系二世は、親との日常会話ができるものの、宗教的あるいは哲学的な内容になると理解が難しい<sup>25)</sup>。そこで、二世に仏教を伝えるために、経典の英訳を本山に要請し、白人僧侶による布教の導入へと転換していったのである。英語布教の取り組みは、本派本願寺が早くから着手しており、1930年代から日系二世開教使を輩出している<sup>26)</sup>。したがって、移民排斥論者が日本人仏教徒は日本語しか教えていないと批判したことはあたらないのだが、彼らは日系人に「100%アメリカニゼーション」を求め

ており、日系コミュニティの主張するバイリンガリズムや「アメリカ人仏教徒」というカテゴリーは中途半端に映ったのである<sup>27)</sup>。当時の100%アメリカニゼーション運動の言説に沿えば、日系でありかつ仏教徒であることは「非アメリカ的」となるからである。つまり、現実には日系コミュニティはアメリカ的に文化変容していったという実態があるが、移民排斥論者はそうした現実を認めようとしなかったのである。

日米開戦は、日系人とくに仏教徒にとって厳しい時代の始まりとなった。FBIは1930年代から日系仏教徒を要注意人物としてリストアップしており、本土と違って10数万もの民間人の強制収容がなかったハワイで、開教使と教団の理事会メンバー、二世の仏教青年会リーダーたちは逮捕、あるいは尋問を受けた<sup>28)</sup>。ハワイ在住の開教使らは、ホノウリウリ収容所などを経て、本土の収容所に移送された<sup>29)</sup>。戦時中の仏教会は放火に遭ったり、金箔が施された内陣の装飾などが盗難に遭ったりした。戒厳令下でハワイの仏教会は閉鎖され、開教使が逮捕されていたため宗教行事を行うことができず、信者が自宅の仏壇を撤去するよう指示されるなど信教の自由が侵害された状態であった。本派本願寺で英語布教を行っていたアーネスト真覚ハントは、こうした状況に抗議した数少ない白人仏教徒であった<sup>30)</sup>。最初に開かれたのは、沖縄系の仏教会である慈光園で、その後に数ヶ寺だけが許可されたのである<sup>31)</sup>。

#### 4. おわりに——「アメリカ宗教」としての仏教

戦時中までは、「敵国」である日本の反米的な宗教とされていたが、戦後は二世が教団の理事会メンバーとなって、日本仏教はいわば「日系アメリカ仏教」になった。年齢、性別、職業を問わず日系人が強制収容された本土と異なり、強制収容された人数が少なかったハワイでは、1945年以降に開教使が強制収容所から解放されてからの復興が比較的容易だったといえるだろう。今日でも、表1と表2で示した仏教教団には日系人の開教使とメンバーが多く、先述した *Aloha Buddha* では、1950年代頃からカウンターカルチャー運動に影響を受けたヨーロッパ系アメリカ人が仏教に近づいていったときに、日系仏教徒が歓迎しなかったとして描いている。1949年に鈴木大拙がハワイ大学で開催された東西哲学会議に参加したのを皮切りに、彼がアメリカ各地の大学で仏教とくに禅に関する講義を流ちょうな英語で行ったことも、アメリカに多大な仏教ブームをもたらすこととなった<sup>32)</sup>。そのブームにもかかわらず、戦後の日系仏教徒がヨーロッパ系の改宗者を受け入れなかったのは、戦時中までのホスト社会の支配層による仏教への差別と弾圧、エスニック・エンクレイブに日系仏教徒を追いやってきた歴史を考えれば、単純に日系仏教徒のエスノセントリズムばかりがその原因だったとはいえないのではないだろうか。

この点について、ヨーロッパ系アメリカ人の改宗仏教徒が多い禅宗でいうと、今日でも日本人の曹洞宗開教使が派遣されるロサンゼルスやサンフランシスコの禅宗寺やサンフランシスコの桑港寺など、日系人メンバーが比較的多く、法要・儀礼など中心で日本的な文化を残した〈禅寺〉と、非日系のアメリカ人僧侶とメンバーがいて、サンフランシスコ禅センターなど坐禅中心の〈禅センター〉で、人種・エスニック構成が分かれがちである<sup>33)</sup>。もちろん、こうした単純な類型化は避けるべきであり、例えば禅宗寺には日系とともにヨーロッパ系やインド系の仏教徒が集って坐禅を

学んでおり、写経や生け花、太鼓などを学ぶクラスも設けられている。一方、〈禅センター〉は、ヨーロッパ系アメリカ人の比率が大きいことから、人種・エスニックな分断を生み出すのは、必ずしもアジア系仏教徒ばかりとはいえない面もあるだろう。

これに対し、仏教系新宗教教団の Soka Gakkai International USA（アメリカ創価学会、以下 SGI-USA）は、アフリカ系やヒスパニック系のメンバーが多く、その人種・エスニック構成の多様性で知られている<sup>34)</sup>。1963年にロサンゼルスで布教を開始し、最初から英語で日系人に限らない布教を行って教勢を広げていった。ティナ・ターナーやハーヴィー・ハンコック、コートニー・ラブなどの芸能人や、ハンク・ジョンソン議員（民主党・ジョージア州選出）といった著名人が改宗したことは、アップルコンピュータ社の創始者スティーブ・ジョブズが禅に影響を受けたことで新たな禅ブームを呼んだように、SGI-USAの知名度を高めている。

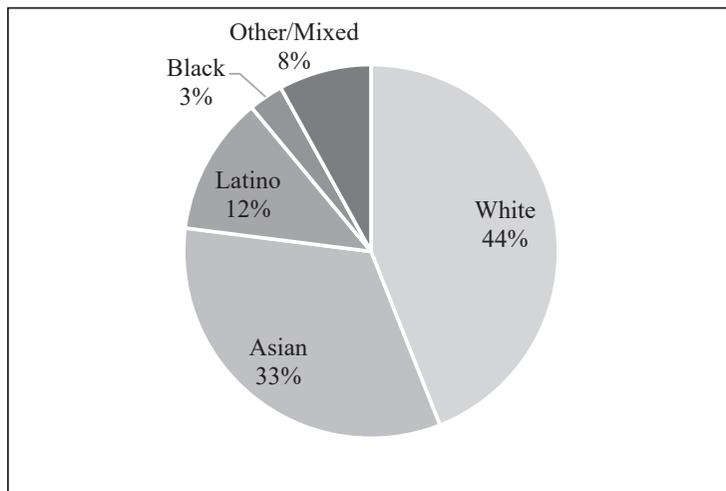
一方、本派本願寺の場合、現在でも日系の開教使とメンバーが多いが、ヨーロッパ系、フィリピン系、中国系の開教使やメンバーも少なくない。また、本土の浄土真宗本願寺派系教団 Buddhist Churches of America（米国仏教団、以下 BCA）傘下の仏教会も同様に、日系以外の開教使やメンバーがいて、羅府別院で輪番を務めるのはヒスパニック系のウィリアム・プリオネス師である。ハワイでも本土でも、教団が抱えている課題は開教使不足であるが、現在も日本から英語が不得意でアメリカ文化を必ずしも理解していない日本人開教使が派遣されることもあげられる。というのも、開教使資格を得るためには、アメリカ人であっても日本語を学び、京都で得度を受けなければならない制度があるため、アメリカ人開教使の養成はハードルが高いのである。筆者が2000年にBCA傘下の仏教会で調査した際と、2018年に本派本願寺でインタビューした際に、いずれもアメリカ人メンバーは、アメリカで布教するのに日本語学習や日本での得度は不要ではないかと述べ、自分たちは英語による宗教的なガイダンスを求めており、日常的に気さくなコミュニケーションを英語で取り合うことを望んでおり、日本人開教使とコミュニケーションがうまく取れないことを不満に感じると語っていた<sup>36)</sup>。こうした問題に対して、BCAでは2000年ごろから在家リーダーを「開教使アシスタント」として養成して、日本語学習や日本での得度という高いハードルを経ずに、地元の仏教会で開教使に準じた活動ができる制度を実施しており、本派本願寺でもその制度を導入して、「ダルマ・ライト」クラスなど仏教の学習会を在家のリーダーの主導で実施している<sup>37)</sup>。

戦前の仏教会は主に日系コミュニティ向けのカルチャーセンターであったが、戦後は日系以外のローカルの人たちと一緒に楽しむ場としても開放している。夏に行われる Bon Dance（盆踊り）で盛り上がったたり、照り焼きチキンや「日本食」のメニューをふるまうバザーや、生け花や空手などの文化を学ぶ教室なども行われている。Bon Dance はだいたい6月から7月にかけての週末に、近隣の仏教会でスケジュールを調整して日程が重ならないように開催される。そうすることで、Bon Dance の好きな地域住民が何度も足を運ぶことができ、仏教会側も来客の取り合いになることを防げるからである。仏教会には写真1のように必ず大きな駐車場があるのでそこに櫓を組み、婦人会や仏教青年会などが軽食を提供する。踊りの輪に加わる人もいれば、持参したデッキチェアでくつろぐ人もいて、夏のひとときを仏教徒でない地域の人も含めてともに楽しむのである。ハワイの地元紙 *Star Advertiser* の記事が示すように、Bon Dance に集う人々は、日系以外も多い、マルチエスニックな人々である<sup>38)</sup>。それはハワイ州自体がア

アメリカの中で最もエスニック的に多様であり、また州内における仏教徒の割合が他州に比べて高いことをも反映しているといえるだろう<sup>39)</sup>。

このように、今日のアメリカ人仏教徒や仏教会に集う人々は日系だけではない。2016年3月号の *Lion's Roar* 誌の表紙が象徴的に示すように、“The New Face of Buddhism” として紹介するアメリカ人仏教徒は多様な人種・エスニック構成となっている<sup>40)</sup>。表4に示す Pew Research Center の調査（2014年）によると、仏教徒の人種・エスニック構成は「白人」44%と、「アジア系」33%よりも多いことがわかる。2007年のデータと比べると、「アジア系」はほぼ変わらないが、「白人」は53%から44%に減少し、「ラティーノ系」で6%から12%、「その他・ミックス」で5%から8%と、それぞれ増加が見られる<sup>41)</sup>。

表4 仏教徒の人種・エスニック構成（Pew Research Center, 2014）



戦前は日本、あるいは中国などアジア系移民の宗教とみなされ、戦時中には「敵国の宗教」として弾圧されてきた。しかし戦後は、強制収容後の再定住期を経て、カウンターカルチャー運動の中での仏教ブーム、1965年の移民法改正による多様なアジア諸国からの移民・難民の増加に伴って仏教の多様化が進んだ。東アジアでは韓国、東南アジア・南アジアの上座仏教圏、チベットなど、様々な仏教の伝統が移民・難民とともにアメリカにもたらされたのである<sup>42)</sup>。そうしたこの数十年の社会背景の変化を反映して、信者のうち移民の第一世代、第二世代が占める割合は、新移民の多いイスラム（一世64%、二世17%）やヒンドゥー教徒（一世87%、二世9%）と比べると低く、一世が26%、二世が22%となっており、キリスト教やユダヤ教以外の宗教では、数世代以上のアメリカ生まれの信者が比較的多い宗教だといえることができる<sup>43)</sup>。その意味でも、ダイアナ・エックが述べたように、仏教は「アメリカの宗教」として根付いているといえるだろう<sup>44)</sup>。

これまで多くの研究者が指摘してきたように、非アメリカ的、非キリスト教的な新しい宗教を求めていたヴィクトリア時代のころから、仏教は「異質な」宗教であるがゆえに、時には批判の対象となり、時には信仰の対象にもなってきた<sup>45)</sup>。ケネス・タナカを借りれば、「仏

教も変わる、アメリカも変わる」のであり<sup>46)</sup>、日本から渡った外来宗教である仏教がホスト社会で文化変容していくダイナミクスを明らかにする作業は、今後も社会が変わっていく中、現在進行形で進めていく必要があるといえるだろう。

付記 本稿の一部は、2015年度一般財団法人仏教学術振興会研究助成「戦前のアメリカにおける日系仏教雑誌に関する基礎的研究」、JSPS 科研費「日米の新資料による日本仏教グローバル化過程の研究—鈴木大拙を事例として」（課題番号 17K02238）および公益財団法人三菱財団 2018年度人文科学助成「鈴木大拙関係松ヶ岡文庫所蔵資料からみた近代禅仏教のネットワークに関する研究」による助成を受けたものです。記して謝辞といたします。

質疑応答（注：読みやすくするため、意味を変えない程度に編集した。）

○小川 それでは、何かご質問等がございましたら、遠慮なく手を挙げてください。

○質問 1 小川先生のお話で、サトウキビ・プランテーションにポルトガル人が中間管理職だったとおっしゃっていましたが、戦前にはどの国からきた人がいたのでしょうか。僕が高校のころお世話になった英語の先生が、日本と中国のルーツを持つハワイアンだったので、戦前のハワイにはどのような人種や民族の人がいたのかなと少し気になりました。

○小川 いろんな人がいます。中国人は割と早いですね。日本人よりも先に中国人が、主に広東や南のほうの人が多くいますが、そのあたりから労働者として行っております。その後日本人が入ってきて、コリアン、フィリピン人。ヨーロッパ系ですとポルトガル人、しかもリスボンとか都市ではなくて、マデイラ島など島嶼地域から行っています。そんな感じで、人種で日本人が一番多かったのですが、いろんな人がいました。

ちょっと補足しますと、いろんな人がサトウキビ・プランテーションで働いていました。例えば、日本人労働者と中国人労働者とフィリピン労働者が仲よくなって、みんなでストライキを起こしたら、何が起きますか。経営者は困るでしょ。だから、微妙に差をつけるの。例えば、時給が日本人は1ドル、中国人は2ドル、フィリピン人は10ドルだったら、日本人は怒りませんか、同じ仕事をしているのに。そうやって、お互いに仲よくなれないような仕組みをつくっています。

だから、これは守屋先生にコメントしていただきたいのですが、何でそういう仏教寺院をたくさんつくらせたかという、日本人同士で固まって、自分は日本人だと意識するようになるわけ。中国人は孔子廟に行っていたし、フィリピン人はカトリックの教会に行ったりして、仲よくなれない。だから、そういう意味もあって、いろんな民族のいろんな宗教施設があったと。

○守屋 そうですね。居住区域が民族ごとに分けられた「キャンプ」で、日本人だけの区域に仏教会ができました。その理由は、本派本願寺の開教監督だった今村がストライキの仲裁に入ったからで、経営者側は仏教を労使問題対策のために利用したのです。ですから、キリスト教会の反対があったにもかかわらずプランテーションに仏教会が多くできたのですが、その後も日本人移民のストは止むことがなかった。教団としては、移民労働者は寺を支えてくれている仏教会メンバーで、そうすると彼らの願っていることを裏切れない。最初は経営者寄りだったのが、次第に労働者寄りになる。最終的には1920年の大規模ストライキで、仏教と神道の聖職者がス

トライキに賛同し、労働条件改善を求める声明を出すに至りました。そのことが、日本人の仏教徒や神道主義者は「反米的」だとするゼノフォビアを形成する伏線となった、とするノリコ・アサト氏の研究があります。

○質問 2 守屋先生に質問です。戦前はアジア系移民の宗教、戦後はアメリカ宗教の一つになったとおっしゃって、英語での布教などの文化変容があったということでした。仏教の教えも移り変わりはあったのでしょうか。

○守屋 いい質問をありがとうございます。変化があり、かつ変化がないということができるかと思います。海外の研究者から言われる日本仏教の最大の特徴は、宗派性が強いことです。日本人の宗祖がいて所依の経典が様々だったり、独自の行事や儀礼があるなど、同じ仏教なのに別物のように宗派色が強く、それをハワイやアメリカ本土で行っている。しかし海外の場合、この宗派色が強いだけだと理解されないところがある。それは日本文化の中で形成された部分が大きいからです。

もう一つは、そもそも仏教とは何かという初歩的なところから説明をしないといけないという事情があります。まず宗派を超えて共通する仏教の基本的な教えを理解してもらって、その上で、各宗派の教えを説くという二段階で話をするわけです。そうすると、日本ではわざわざ話さないことも説明する必要がある、自ずと説き方が変わってくる。それは、仏教徒でない人のために話をするからで、当然、文化変容が起こる。教団関係者は、教義は同じだと話しますが、客観的に見ると、説明の仕方や、翻訳の過程でも変化が生じてきます。それは当然のことだと思います。

○小川 建物も随分、日本のお寺と雰囲気が違うなと思って。

○守屋 建物もそうです。

○小川 椅子ですしね。

○守屋 そう。最近では、日本のお寺でもパイプ椅子を使っていますが、ハワイでは最初から据えつけてあるのです。

○質問 3 広島でも曹洞宗が多い地域があります。比婆郡帝釈村からワイパフへ行った祖父がいます。ハワイと日本だけでなく、ワイパフと広島県の特定の村という1点と1点の結びつきがあって、実際うちのひいじいさんは、何回も往復しているんです。だから今、守屋さんの話も聞きまして、自分が出てきたおらが村とか町とかと、自分がたまたまハワイで、マウイ島やったりオアフ島やったり、そこにいて、たまたまヒロに住んだ人もいれば、ラハイナに住んだ人もいれば、うちのひいじいさんみたいに、ワイパフに住んだ人もいます。そことその物語なんですよね。

○守屋 出身地からの連鎖的な移民の話で、例えば比婆郡つまり、広島の中でも東から北東部にかけて移民を出した備後地方に曹洞宗が多いというのは、有元正雄氏の研究（『真宗の宗教社会史』）があります。広島市など安芸地方に、真宗の人が多かったというのは有名です。山口県で言えば、全体としては真宗が強いですが、県内でも移民を多く出した沖家室を含む周防大島では浄土宗が強い。この点に関してはすでに論文を書きましたが、ハワイから自分の村の檀那寺の僧侶に来てもらうよう本山に要請しているので、比婆郡の帝釈村とワイパフが結びつくという、点と点の結びつきがあるのはあり得るだろうと思います。

○小川 点と点の話ですけれども、今おっしゃったのは農民的発想だなと思いました。漁民は「面」で、太平洋を面で見ている。だから、例えば沖家室島の方々は、沖家室とハワイ・ヒロの港だけでは見ていない。ものすごく動き回っていて、しかも船の上では、同じ村だけでなく、広島の人とかハワイ人とか、いろんな人と一緒に乗っていますね。だから、プランテーションでは、例えば中国人と日本人が仲よくなるようにしていたけれども、それが漁船の上ではない。同じ船に乗っている乗組員としての一体感は持っていますが、村単位では考えていない。戦前から、沖家室や和歌山県の漁師さんは、ハワイ中を動き回っていた。そのうちハワイじゃ飽き足らなくなって、沖ノ鳥島近くまで来ていました。ハワイに行って日本に戻ってきたりして、すごいのは、戦前からワシントン DC に人を送り込んだり、自分が出向いて、アメリカ政府にロビー活動的なことをしていく。

だから、点と点ではない。特に漁師さんたちは、何か太平洋という「面」で見ている感覚があります。実は私、5年ぐらい研究していて、農村出身の視点からハワイを見ているだけだとわからないなと思っています。先日、出席した「元年者シンポジウム」（注：2018年6月にワイキキにおいて元年者来布150周年を記念して開催された）で、プランテーションでの作業着の女性が出てきて、どうしようかと思ったぐらいです。1人ぐらいは釣りざおを振り回す漁師さんが出てきてほしいなと思いました。

だからきょう、守屋先生がタイトルにあげたグローバル化とローカル化、両方必要だと思います。自分の村を大切にすると、自分の村と例えば沖家室の何とか寺とか、何とか神社との非常に小さなつながりと同時に、日本とハワイだけでなく、太平洋世界みたいな、そういうすごく大きな視点と、常に両方でカメラを切り換えるみたいな感じで、両方見ていくという視点がこれからの研究には必要なと思います。

○守屋 もう一つ追加すると、私のゼミ生で、和歌山県太地町出身の学生がいます。漁師の町で、彼のおじいさんは、戦後に移民したそうです。最初にオーストラリアで真珠貝のダイバーとして、木曜島という北部の赤道に近い島に行き、体を壊していったん太地に戻った後、今度はロサンゼルスに行く。おそらく、ターミナルアイランドだと思いますが、今度はアメリカで仕事をするという、そういう海に関係したことで仕事があればそこに行くのです。私たち研究者は、どうもハワイだけ、アメリカ本土だけ、オーストラリアだけ、と分けて考えてしまうのですが、移民一人一人の視点からすると、仕事があれば、あるいは魚がいれば、そこに行く。とくに、先ほど小川先生がおっしゃったように漁民は「面」で移動するので、海があるから移動できるわけですね。私たち陸の人間は、海が障壁になっていると考えてしまうのですが、漁師はそうではない。それはその通りだと思います。

○小川 つい熱くなります。自分が今、追っかけている研究テーマに近いことにちょっと触れてしまうと。

○質問 4 今、サークルでフラダンスに入っているのですが、フラについて知りたいなと思っています。小川先生がおっしゃった、ハワイからもたらされたものの中に、多分、フラの文化もあると思うのですが、いつごろから日本にフラの文化が広まっていったのでしょうか？

○小川 ぜひ、私のゼミに来て、研究してください。はっきりしているのは、ここ最近で、非常にフラが流行っていること。私、2004年あたりまでハワイにいた時に、合気道を習っていま

した。なぜかという、フラだと日本に帰ったら習えないと思ったから。だから、日本に帰っても続けられるように合気道を習って、結構頑張ったのに、日本に帰ってきたら、あっちにもこっちにも。立命館大学でもいて、結構うまいですよ。本当に驚きました。ここ数年では、フラの専門雑誌も出ていて、これは一体、何が起きているのか、逆に私が知りたいですね。

実際、ハワイの人が、日本のフラがどういうふうに使われているかというのを研究しています。その方によると、何か日本の茶道のお家元みたいな感じになっているそうです。お師匠さんがいて、ある程度うまくなると免許皆伝される。でもそれは、ハワイで行われているフラの継承の仕方と違って、ですから日本に入ってくると、フラの習い方とか、教え方とか、それらも含めて日本化する。例えば、「フラダンス」という言い方は、私はしません。なぜかといったら、フラは踊りだけじゃないからなのです。踊りはその一部でしかない。さっきお見せした、写真のように、チャントをするとか、フラを踊る場所、レイとかをつくる作業も含めて、フラである。レイをつくるお花を山の中にとりにいく、その行為もフラなのです。ダンスのところだけ取り上げて、日本の人は「フラダンス」と言っているけれど、ハワイの人にとってはその〈場〉というか、フラに関するもの全てが含まれてくるので、その辺で日本化していると思います。だから、ぜひ研究してみてください。これはとことん向き合うと、深いですよ。

○質問 5 フラは昔、ハワイでは禁止されていたんですよ。ところが、観光客が来るようになってきて、白人が観光用のフラをつくったわけです。だから最初、日本に入ってきたフラは、恐らく観光用のフラとして入ってきたけれども、1970年代ごろから、ハワイアン・ルネッサンスという動きがあり、観光化されたハワイの文化じゃなくて、本当の意味でのローカルなカルチャーをもう一度見直してみようというのが、音楽の世界でも、フラの世界でも出てきた。戦前から日本にはハワイアンの大ブームというのがありまして、戦前、戦後、二世の人たちがたくさん日本にそれを伝えたわけなんです。それから日本人はポリネシアンダンスとフラを一括にしちゃいますよね。ハワイアンセンターで踊っているのは、あれはフラじゃない。専門家の方がおられるので、いっぱい資料があるんですけども、フラはとにかく最初は禁止されていたんです。

○小川 それは最初から禁止されていたわけじゃなくて、フラはもちろん継承されていて（注：カメハメハ三世が1825年にフラを禁止したが、それを無視してフラを演じ続けさせる首長もいた）、キャプテン・クックが1778年にハワイへ来て、それからヨーロッパ人がやってくる。そうすると、裸に近い格好で腰を振って踊るのはいかがわしいということで、ハワイの王様に禁止させてからです。でも、こっそり踊っている人はたくさんいたから、生き残っているわけです。官約移民の時代に、日本にやってきたカラカウア王は、フラを復活させました。そういう意味では、今、彼はフラの恩人のように扱われていて、毎年4月にハワイ島ヒロで、フラの最高峰、「メリー・モナーク・フェスティバル」が行われています。そのメリー・モナークとは、カラカウア王のニックネームです。「陽気な王様」という意味。だから、彼の功績にちなんで、フラのコンテストが開かれているといいます。だから、フラは奥深い。これだけで90分話ができます。

まだまだ話は尽きないですが、時間が来たのでここで終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

注

- 1) 森本豊富「日本における移民研究の動向と展望—『移住研究』と『移民研究年報』の分析を中心に」『移民研究年報』14, 2008年, 33-36。統計では宗教学, 文学と一緒にされているが, 「宗教学」のみでみれば他分野に比べてごく少ない。
- 2) Richard M. Jaffe, "Buddhist Material Culture, 'Indianism,' and the Construction of Pan-Asian Buddhism in Prewar Japan," *Material Religion* 2 (3), 2006, 266-293 (リチャード・ジャフィ (桐原健真, オリオン・クラウタウ共訳) 「戦前日本における仏教的物質文化, 〈インド趣味〉, および汎アジア仏教の形成」『東北宗教学』4, 2008年, 157-189)。
- 3) バランボ湊石ローレン麗子「ハワイにおける「プランテーション住居型」寺院建築の研究——ハワイの日系人社会における寺院建築の変容に関する研究 (1)」『日本建築学会計画系論文集』63 (513), 1998年, 275-279; バランボ湊石ローレン「ハワイの日系人社会における仏教寺院建築の変容過程」(早稲田大学提出博士論文, 1999年), chaps. 5-8。
- 4) Ronald Takaki, *Pau Hana: Plantation Life and Labor in Hawaii, 1835-1920*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1983, 108-9 (ロナルド・タカキ (富田虎男・白井洋子訳) 『パウ・ハナ——ハワイ移民の社会史』刀水書房, 1986年)。タカキをはじめ, ハワイ日系移民史研究では, 当時本派本願寺の開教監督だった今村恵猛が1904年のオアフ島ストライキに介入したことがきっかけだと論じるが, 今村がその後, ストへの介入を止め, むしろスト破りをしないよう本派本願寺所属の開教使に促していたことにふれた研究はほとんどない。拙稿「日本仏教のハワイ布教と文化変容——ハワイ本派本願寺教団を中心に」『歴史評論』756, 2013, 29-31; Moriya Tomoe, "Buddhism at the Crossroads of the Pacific: Imamura Yemyō and Buddhist Social Ethics," in *Hawai'i at the Crossroads of the U.S. and Japan before the Pacific War*, ed. John T. Davidann, Honolulu: University of Hawaii Press, 2008, 198-201。
- 5) 星野英紀「ハワイにおける大師信仰の展開と真言宗寺院の活動」柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教——ハワイ日系人宗教調査報告書』東京大学宗教学研究室, 1981年。
- 6) 小川真和子「「元年者」とハワイ——ハワイにおける日本人移民の始まりとその後」『立命館言語文化研究紀要』31巻1号, 2019年, 3-16。
- 7) Louise H. Hunter, *Buddhism in Hawaii: Its Impact on a Yankee Community*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1971, 31。
- 8) 拙稿「太平洋を越えた仏教東漸——ハワイ・アメリカにおける日系コミュニティと仏教教団」中牧弘允, ウェンディ・スミス編『グローバル化するアジア系宗教——経営とマーケティング』東方出版, 2012年, 309-315。
- 9) 拙稿「戦前のハワイにおける日系仏教教団の諸相」『立命館言語文化研究』20 (1), 2008年, 119; 拙稿「戦前のアメリカにおける日系仏教雑誌に関する基礎的研究」2015年度一般財団仏教学術振興会研究助成成果報告書, 2016年。このほかキリスト教や, 天理教や金光教などの新宗教も布教所をつくっている。
- 10) 拙著『アメリカ仏教の誕生——二〇世紀初頭ハワイにおける日系宗教の文化変容』現代史料出版, 2001年, 4章。
- 11) 拙稿「太平洋を越えた仏教東漸」。
- 12) 拙稿「日本仏教のハワイ布教と文化変容」, 23-36。
- 13) 拙稿「日系コミュニティのタウン誌としての仏教雑誌——草創期の『米国仏教』からみる仏教会の活動と役割」細川周平編『日系文化を編み直す——歴史・文芸・接触』ミネルヴァ書房, 2017年, 107-123。
- 14) Nancy S. Shiraki, ed., *Hōsha: A Pictorial History of Jōdo Shinshū Women in Hawaii*, Honolulu: Hawaii Federation of Honpa Hongwanji Buddhist Women's Associations, 1989; 本多彩「アメリカ仏教会における

- 食文化の変遷』『宗教研究』90(2), 2016, 157-182; 松本ユキ「レシピの余白に書き込まれた食物語——日系アメリカ人とクックブック」マイグレーション研究会例会報告, 於同志社大学, 2018年10月6日。
- 15) Shiraki, *Hōsha*. また, ワシントン州シアトルの事例だが, 本多彩「アメリカに移住した日本人女性たちと仏教」『近代仏教』24, 2017年, 52-59を参照。
- 16) Eileen H. Tamura, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity: The Nisei Generation in Hawaii*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1994, chaps 5 and 7.
- 17) Tamura, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity*, chap. 7; Noriko Asato, *Teaching Mikadoism: The Attack on Japanese Language Schools in Hawaii, California, and Washington, 1919-1927*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2006, chaps. 1-2.
- 18) 拙著『アメリカ仏教の誕生』, 103-122。
- 19) Tamura, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity*; 沖田行司『ハワイ日系移民の教育史——日米文化, その出会いと相剋』ミネルヴァ書房, 1997年; Asato, *Teaching Mikadoism*.
- 20) Tamura, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity*, chap. 7.
- 21) 従来のアジア系アメリカ研究における歴史叙述を再考し, より複雑で実証的な考察を加えたアジア系アメリカ史研究として, Lon Kurashige, *Two Faces of Exclusion: The Untold History of Anti-Asian Racism in the United States*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2016がある。
- 22) Daryl Johnson, “Report: Rise in Hate Violence Tied to the Presidential Election,” Southern Poverty Law Center, <<https://www.splcenter.org/hatewatch/2018/03/01/report-rise-hate-violence-tied-2016-presidential-election>> 2019年1月19日閲覧。
- 23) “Statement by Honpa Hongwanji Mission of Hawaii Office of the Bishop and Committee on Social Concerns on the Presidential Executive Order on Refugees and Immigration,” Honpa Hongwanji Mission of Hawaii, <<https://hongwanjihawaii.com/blog/2017/02/02/statement-on-immigration-order/>>; “Statement against the Separation of Families,” Honpa Hongwanji Mission of Hawaii, <<https://hongwanjihawaii.com/blog/2018/06/20/statement-against-separation-of-families/>>. 2019年1月19日閲覧。
- 24) 拙稿「二〇世紀初頭ハワイにおける国際派仏教徒たち——角田柳作と今村恵猛を中心に」『近代仏教』7, 2000年, 70-80.
- 25) Tamura, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity*, 198-210; David K. Yoo, *Growing Up Nisei: Race, Generation, and Culture among Japanese Americans of California, 1924-1949*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2000, chap. 2; 拙著『アメリカ仏教の誕生』, 122-128。また, *Aloha Buddha* に登場する二世の仏教徒や改宗したキリスト教徒の証言を参照。
- 26) 拙稿「日系二世仏教徒が見いだした「仏教」——比較思想史の視点から」マイグレーション研究会編『来日留学生の体験——北米・アジア出身者の1930年代』不二出版, 2012年, 93-110。
- 27) Tamura, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity*, 84-88, 151-153.
- 28) Duncan Ryūken Williams, *American Sutra: A Story of Faith and Freedom in the Second World War*, Cambridge: Harvard University Press, 2019.
- 29) 山里慈海『居士は春風』百華苑, 1945年; 平井智親「忘れられたハワイ・ホノウリウリ監禁所」『中外日報』2018年5月9日。
- 30) Hunter, *Buddhism in Hawaii*, 187-193.
- 31) Shizue Miyasato, comp., “History of Jikoen,” *Jikoen Hongwanji: Seventy Years*, Honolulu: Jikoen, Hongwanji Mission, [2008], 15.
- 32) Richard M. Jaffe, “Introduction to the 2010 Edition,” in *Zen and Japanese Culture*, by Daisetz T. Suzuki, Princeton: Princeton University Press, 2010, vii-xxviii (リチャード・ジャフィ(小川隆訳)「いま, 大拙を読む——Zen and Japanese Culture 二〇一〇年版解説」『思想』1082, 2014年, 85-110)。

- 33) 拙稿「欧米の仏教ブームとアジアの社会参加仏教」大谷栄一ほか編『近代仏教スタディーズ』法蔵館、2016年、65。
- 34) Richard Hughes Seager, *Encountering the Dharma: Daisaku Ikeda, Soka Gakkai, and the Globalization of Buddhist Humanism*, Berkeley: University of California Press, 2006, chaps. 8-9. なお創価学会は、日本の宗教学研究では「新宗教」と分類されるが、欧米では「仏教」として他の伝統教団と同様に分類されている。
- 35) 拙稿「アメリカ合衆国における日系仏教とエスニシティ——米国仏教団（BCA）を中心に」『近代仏教』9、2002年、72-90。
- 36) 拙稿「アメリカ合衆国における日系仏教とエスニシティ」；本派本願寺教団副理事のデクスター・マー氏とのインタビュー、2018年9月14・15日、於本派本願寺。また *Aloha Buddha* の証言を参照。
- 37) 拙稿「アメリカ合衆国における日系仏教とエスニシティ」；マー氏とのインタビュー、2018年9月14・15日、於本派本願寺。
- 38) Kat Wade, “Honpa Hongwanji Bon Dance,” *Star Advertiser*, June 26, 2017. <<https://www.staradvertiser.com/2017/06/26/tgif/tgif-photos/honpa-hongwanji-hawaii-bon-dance/>>. 2018年10月4日閲覧。
- 39) “Buddhists by State,” *Religious Landscape Study*, Pew Research Center, <<http://www.pewforum.org/religious-landscape-study/religious-tradition/buddhist/>>. 2018年10月4日閲覧。
- 40) この「新しい顔」のエスニックな描き方の問題に関して、仏教系 NGO の Buddhist Peace Fellowship は批判的なコメントを寄せている。TW Editor, “5 Responses to the Awkwardly Titled ‘New Face of Buddhism,’” *Buddhist Peace Fellowship*, <<http://www.buddhistpeacefellowship.org/5-responses-to-the-new-face-of-buddhism/>>. 2019年1月19日閲覧。
- 41) “Racial and ethnic composition among Buddhists,” *Religious Landscape Study*, Pew Research Center, <<http://www.pewforum.org/religious-landscape-study/religious-tradition/buddhist/>> 2018年10月4日閲覧。
- 42) Charles S. Prebish and Kenneth K. Tanaka, eds., *The Faces of Buddhism in America*, Berkeley: University of California Press, 1998; Duncan Ryūken Williams and Christopher S. Queen, eds., *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*, Richmond: Curzon Press, 1999; Thomas A. Tweed and Stephen Prothero, eds., *Asian Religions in America: A Documentary History*, Oxford: Oxford University Press, 1999; ケネス・タナカ『アメリカ仏教——仏教も変わる、アメリカも変わる』武蔵野大学出版会、2010年を参照。
- 43) “Immigrant status among Buddhists,” “Immigrant status by religious group,” *Religious Landscape Study*, Pew Research Center, <<http://www.pewforum.org/religious-landscape-study/religious-tradition/buddhist/>> 2018年10月4日閲覧。
- 44) Diana Eck, “Becoming the Buddha in L.A.,” WGBH Educational Foundation, 1993（タナカ『アメリカ仏教』、317-318より引用）。
- 45) Thomas A. Tweed, *The American Encounter with Buddhism, 1844-1912: Victorian Culture and the Limits of Dissent*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2000（トマス・ツイード（島津恵正抄訳）「秘教主義者、合理主義者、ロマン主義者——欧米仏教徒の類型」末本文美士ほか編『ブッダの変貌——交錯する近代仏教』法蔵館、2014年、179-213）；Tetsuden Kashima, *Buddhism in America: The Social Organization of an Ethnic Religious Institution*, Westport: Greenwood Press, 1977; Duncan Ryūken Williams and Tomoe Moriya, eds., *Issei Buddhism in the Americas*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2010.
- 46) タナカ『アメリカ仏教』、313-317。

